

伝統技法を活用した新製品開発

水野 潤^{*1}、生浦京子^{*2}

Design of Ceramic Ware by Traditional Art

Jun MIZUNO^{*1} and Kyouko IKUURA^{*2}

Tokoname Ceramic Research Center, AITEC^{*1 *2}

常滑地区は中部国際空港開港や歴史的な陶産地の雰囲気が残る散策コースなどが人気で観光客が増加の一途である。一方、陶磁器業界は海外や他産地との競合、市場の充足感から陶磁器製品の販売は厳しい状況が続いている。このようなことから、常滑市への来訪者をターゲットとした陶製グッズのデザイン開発を行った。コンセプトは常滑で古くから行われている「伝統的な陶器製造技法を生かした商品」開発である。そのため伝統技法の製作工程の調査を実施し、映像資料の作成も併せて行った。

1. はじめに

食器・置物など一般的な陶磁器市場は成熟化が進んでいて、家庭内でも飽和状態であって厳しい状況が続いている。需要の伸び悩みに加えて諸外国からの輸入攻勢のほか国内産地間における競争が激化している。大量に生産する商品生産の海外シフトが進み、結果国内では工業製品的なアイテムから工芸品的なアイテムへの生産にシフトする傾向にある。

こうした状況の打開策の一つとして、日本六古窯の一つである常滑は古来より陶磁器製造の優れた技法が受け継がれていることに着目し、常滑焼の伝統技法を調査・記録し、これを活用して様々な消費者の感性に訴える少量生産の商品開発を目指した。

2. 伝統技法の調査・記録

常滑焼らしさを製品に生かすため、常滑らしさを形成する技法の調査と記録を行った。16年度は「茶器編」として朱泥急須として有名な茶器製作の技法について実施した。17年度は壺や甕などを代表とする常滑焼の得意技である大物成形技術と繊細な粘土ワークの陶彫技法について調査し、「大物・陶彫編」¹⁾としてまとめた。

この事業の最終年度なる平成18年度は、「陶芸編」と称しこの2年間で収録しきれなかった幅広い技法を選定し、各実演者による製作工程をビデオに収録した。収録したビデオは編集し、ナレーション、字幕、タイトル、エンドロールを加えて約2時間にまとめた。完成したビデオはDVDとVHSテープに保存し、開発研究の資料とするほか、常滑市商工観光課や図書館など県内関係機関に配布し、一般に貸し出すことにより常滑焼に対する理

解を深めてもらう教材としての活用も図った。そのDVD資料を図1に示す。

2.1 調査を行った技法(図2, 3)

2.1.1 削り、紐づくり技法

「紐づくり」は「巻積(まきずみ)」、「積み上げ」とも言われている²⁾。小西洋平氏(陶楽板山窯、日本工芸会正会員)により、「削り」「紐づくり」技法を用いてダイナミックな造形の2種類の花器製作工程を収録した。

2.1.2 縁切り、凹まし技法

「凹まし」は適当な名称がないため「凹まし」³⁾とした。これは成形後まだ柔らかいうちに指やヘラで押さえた線とかくぼみなどを作る技法である。この技法を用いた「阿古陀(あこだ)」と呼ばれる小型の花器の工程の記録を行った。



図1 常滑焼伝統技法 DVD

*1常滑窯業技術センター 応用技術室 *2常滑窯業技術センター 応用技術室(現常滑窯業技術センター 開発技術室)

「縁（ふち）切り」技法は「端切り」とも呼ばれ³⁾、器のふちを切り取り、変化をつけるもので桃山時代以後多く作られている日本の焼き物の代表的な技法である。今回はこの技法により「割山椒」とよばれる小鉢の製作工程をビデオに記録した。

制作は人間国宝であった三代常山（じょうざん）のご子息である山田絵夢（えむ）氏にお願いした。絵夢氏は、茶器や花器、食器など、趣のある暮らしの器に多くの実績があり、2006年9月四代常山を襲名している。

2.1.3 練り上げ技法

「練り上げ」技法とは2,3種類の異色土を練り合わせて文様を作る技法で、その特徴は表面だけではなく裏まで通って素地自体が文様化している点である。

その模様により幾何学的な「市松手」やウズラの羽模様を感じさせる「うずら手」のほかロクロを使用して墨流しのような流れる模様も作ることが可能である。今回、田鶴浜優香氏により「市松手」、「うずら手」による小鉢の製作工程を収録した。

削り (花器)	縁切り (小鉢)	練り上げ (小鉢)	象嵌 (花器)	刷毛目 (長角皿)
				
口をすぼめる	ロクロで挽き上げる	タタラに切る	タタラを切る	土練り
				
表面を整える	指で形を作る	積み重ね再度切る	石膏型で成形	ロクロ成形
				
成形完了	底の仕上げ	ずらして再び重ねる	上下型の合体	切り広げる
				
ヘラで削る	ヘラで切る	再度タタラに切る	模様を彫る	細部の調整
				
完成	足を付ける	石膏型押し成形	色土で象嵌	刷毛目
				
完成	完成	完成	完成	完成

図2 伝統技法の記録

2.1.4 象嵌技法

「象嵌」技法は、陶磁器だけではなく他の素材でもよく使われている。成形した本体に異色の素地を埋め込んで文様を表す技法である。また、「三島手」は象嵌技法の一種であり、彫りの代わりに印花、色土の代わりに化粧土を用いるなど簡素化した技法であるが独特の味わいがある。実演は「象嵌」技法に定評のある水上勝夫氏（一片窯）に依頼し、左右に広がりのあるシャープな形状に

繊細な彫りを加え、色土を埋め込んだ花器の製作工程を記録した。

2.1.5 押文様、刷毛目技法

「刷毛目」は朝鮮由来の技法²⁾で白絵土を刷毛で一筆に器に塗ったものである。刷毛には「ミゴ」と呼ばれる実を取り去った稲の穂を束にしたものが良いとされている。今回は谷川仁氏（クラフト仁）による長角皿をロクロ成形から刷毛目を付けるまでの工程を収録した。また同氏

による「押模様」技法を使った花器の再作工程も収録した。「押模様」は「印花」の手法と同じで素地の柔らかいうちに判を押して文様を作る方法である。

今回は砕いた陶片を判として花器の外周に自然味のある凹文様をつけた後、化粧土で凹部を埋めた花器の製作工程を記録した。

2.1.6 ロクロ成形技法

ロクロ成形は古くから行われている効率の良い成形方法である。大祖窯の竹内公明氏による大皿のロクロ成形及び釉薬の流し掛け工程を撮影した。

2.1.7 ロウ抜き、染付技法

「染付」は中国明代の始めに完成した陶磁器装飾を代表する技法である。白地の素地に呉須(コバルト)による絵付けを行い、その上に釉薬を掛けてものである。山田元三氏による「染付」技法で加飾した飾り陶板と「ロウ抜き」技法を用いた大鉢の制作工程を記録した。「ロウ抜き」とは陶画糊(撥水剤)を使い筆で絵柄を描き、その後呉須染付を行うことで、絵柄が呉須をはじき白く抜けた文様が浮かびあがる手法である。

今回はさらに印刀彫りや呉須による細部の描画を加え趣のある大鉢を製作した。

2.1.8 穴窯焼成

穴窯(窖窯)は中世から続く窯体構造の一種であり、斜面を掘って築かれたが次第に半地上式、地上式へと変化していった。

常滑の穴窯焼成では薪の投入方法に特色があり、連続的に供給していく方法がとられている。常滑市陶芸研究所の穴窯焼成過程を施釉から窯出しまで撮影し記録をおこなった。

		
		
		
		
		
		
		

図3 伝統技法の記録

3. デザイン開発

これまで実施してきた調査・記録を参考に、中部国際空港や常滑市内の観光スポットでの販売を主目的として、鏡フレームなどインテリア用品、茶葉入れなどのテーブルウェア、ペンダントなど装身具デザインし提案を行った。(図4~7)

4. 結び

平成16年度から3年間にわたり、伝統技法を活用した新商品開発を模索するため、常滑に古くから伝わる伝統技法を調査・記録してDVD及びVHSテープの技術資料の作成を行った。本年度は最終年度にあたり、「陶芸編」と称して多彩な陶芸技法を対象に記録した。

完成した視聴覚資料は関係機関に配布し、常滑焼の啓蒙・普及、拡販のツールとして供した。

これらの技術資料を活用し、伝統を新しい視点で捉え直して、インテリア用品や陶製装身具等新商品をデザイン開発し、試作を行った。



図4 のた絵鏡フレーム



図6 ピンクッション



図5 卓上茶葉入れ



図7 象嵌風陶製装身具

謝辞

本研究にあたり伝統技法の実演をしていただいた陶楽板山窯小西洋平氏、常山窯山田常山(四代)氏、田鶴浜優香氏、一片窯水上勝夫氏、クラフト仁の谷川仁氏、大祖窯竹内公明氏、常滑市立陶芸研究所、また工程説明のナレーションに協力していただいた青木友子氏に厚く感謝します。

文献

- 1) 水野ほか：愛知県産業技術研究所研究報告，5，100（2007）
- 2) 加藤唐九郎：原色陶器大辞典，P1037（1972），淡交社
- 3) 日根野作三：陶磁器の装飾技法，P109（1969），日本磁器意匠センター